

3. 1. 学術論文

3. 1. 1. 国際ジャーナル

1. Okada Y, Shibamoto C, Osumi Y, Asano C, Takeuchi R, Nabeshima S, Morioka S, Shomoto K
Transcranial direct current stimulation combined with action observation and electromyographic biofeedback training in a patient with writer's cramp.
Journal of Movement Disorders. 2018. 11(2):82-86.
書痙患者一症例に対して感覚運動皮質を抑制する tDCS を書字動作の運動観察と EMG biofeedback training に合わせて行うことにより，書字動作が改善したことを報告した.
2. Okada Y, Shiozaki T, Nakamura J, Azumi Y, Inazato M, Ono M, Kondo H, Sugitani M, Matsugi A.
Influence of the intensity of galvanic vestibular stimulation and cutaneous stimulation on the soleus H-reflex in healthy individuals.
Neuroreport. 2018. 29(13):1135-1139.
直流前庭電気刺激をヒラメ筋 H 反射を誘発する脛骨神経刺激の 100ms 前に与えることによる H 反射が促通するが，その促通は単なる皮膚刺激によるものではなく，皮膚刺激と前庭系の刺激によるものであることを明らかにした。またその評価を行う際，3mA 以上の刺激強度で直流前庭電気刺激を与えるのが望ましいことも明らかにした.
3. Morioka S, Hayashida K, Nishi Y, Negi S, Nishi Y, Osumi M, Nobusako S
Changes in intentional binding effect during a novel perceptual-motor task.
Peer J. 2018. 6:e6066.
運動の意図ならびに目標値が潜在的な運動主体感および運動学習にとって重要であることを Intentional Binding 課題を用いて実験的に明らかにした.

4. Nobusako S, Sakai A, Tsujimoto T, Shuto T, Nishi Y, Asano D, Furukawa E, Zama T, Osumi M, Shimada S, Morioka S, Nakai A
Manual Dexterity Is a Strong Predictor of Visuo-Motor Temporal Integration in Children.
Frontiers in Psychology. 2018. 9:948.
子どもの微細運動機能は視覚・運動統合能力の予測因子であることを明らかにした。
5. Nobusako S, Ishibashi R, Takamura Y, Oda E, Tanigashira Y, Kouno M, Tominaga T, Ishibashi Y, Okuno H, Nobusako K, Zama T, Osumi M, Shimada S and Morioka S
Distortion of Visuo-Motor Temporal Integration in Apraxia: Evidence From Delayed Visual Feedback Detection Tasks and Voxel-Based Lesion-Symptom Mapping.
Frontiers in Neurology. 2018. 9:709.
脳卒中後失行症では、感覚・運動統合が困難となっており、失行症状と感覚・運動統合障害は共に左腹側・背側ネットワークの損傷に由来することを明らかにした。
6. Nobusako S, Osumi M, Matsuo A, Fukuchi T, Nakai A, Zama T, Shimada S, Morioka S
Stochastic resonance improves visuomotor temporal integration in healthy young adults.
PLoS One 2018. 13:e0209382
感覚閾値未満の振動触覚刺激による確率共鳴現象の付与が、若年健常成人の感覚・運動時間的統合機能を即時的に向上することを明らかにした。
7. Osumi M, Inomata K, Inoue Y, Otake Y, Morioka S, Sumitani M
Characteristics of Phantom Limb Pain Alleviated with Virtual Reality Rehabilitation.
Pain Medicine. 2018. 1-9.
バーチャルリアリティでの鏡療法がどのような幻肢痛に効果的なのかを調べた結果、幻肢の姿勢・運動に関連するような幻肢痛に効果が発揮されやすい傾向を報告した。

8. Ohmatsu S, Takamura Y, Fujii S, Tanaka K, Morioka S, Kawashima N
Visual search pattern during free viewing of horizontally flipped images
in patients with unilateral spatial neglect.

Cortex. 2018. 113(1). 83-95.

視線分析によって半側空間無視症状を簡便かつ定量的に評価できる手法を開発し、その有用性を検証した。また、画像特性によって視線行動が変化することを明らかにした。とりわけ人の顔に関しては、無視空間へ視線が移動することが明確になった。

9. Shigetoh H, Osumi M, Morioka S
Experimental Pain Is Alleviated by Manual Traction Itself Rather than
Subjective Bias in the Knee: A Signal Detection Analysis.

Pain Medicine. 2019. 1:1-8.

徒手牽引の鎮痛効果を感度によるものか主観的なバイアスによるものか鑑別するために、信号検出理論と呼ばれる心理物理学的手法を用いて、徒手牽引および触刺激の A δ 線維由来の一次痛および C 線維由来の二次痛に対する鎮痛効果が、疼痛感受性の低下によるものか主観的なバイアスによるものかを鑑別し検討した。その結果、徒手牽引は一次痛に対して鎮痛効果を有し、触刺激は一次痛および二次痛に対して鎮痛効果を有していることがわかった。そして、徒手牽引の一次痛の鎮痛効果は、主観的なバイアスよりも疼痛感受性の低下の影響によって引き起こされていることが明らかになった。

10. Katayama O, Tsukamoto T, Osumi M, Kodama T, Morioka S.
Neural Mechanism of Altered Limb Perceptions Caused by Temporal
Sensorimotor Incongruence.

Frontiers in Behavioral Neuroscience. 2018. 12:282.

映像遅延装置と脳波を用い、感覚運動の時間的不一致により変容した身体性と運動制御に関連する神経機構を検討した。身体性と運動制御に影響が出現するタイミングは、時間的不一致の程度により異なることがわかった。そして、運動関連領野および頭頂連合野の神経活動性が関連していることが明らかとなった。

11. Katayama O, Nishi Y, Osumi M, Takamura Y, Kodama T, Morioka S.
Neural activities behind the influence of sensorimotor incongruence on dysesthesia and motor control.
Neuroscience Letters. 2019. 698:19-26.
感覚運動の空間的不一致により変容した身体性および運動制御に関連する神経機構を検討した。身体性の変容として奇妙さが有意に高値を示し，運動の正確性は有意に低下した。脳波活動は，前補足運動野および帯状皮質運動野といった運動関連領域においてベータ波帯域の神経活動性の有意な低下を認めた。

12. Osumi M, Sumitani M, Otake Y, Morioka S
A hypothetical explanatory sensorimotor model of bilateral limb interference.
Medical Hypotheses. 2019. 122: 89-91.
健肢の体性感覚を参照すると感覚性失調症が軽減する臨床データを示した上で，両手間の干渉メカニズムを考察し，その仮説モデルを提案した。

13. Morioka S, Osumi M, Nishi Y, Ishigaki T, Ishibashi R, Sakauchi T, Takamura Y, Nobusako S
Motor imagery ability and function of hemiplegic upper limb in stroke patients.
Annals of Clinical and Translational Neurology. 2019. 6(3): 596-604.
両手干渉タスクによって定量化した脳卒中片麻痺の運動イメージ能力が，上肢の使用頻度と関係していることを明らかにした。

3. 1. 2. 国内ジャーナル（原著）

1. 田中陽一，大住倫弘，佐藤剛介，森岡 周
日中の活動が慢性疼痛の日内変動に及ぼす影響—腕神経叢損傷後疼痛を有する1症例での検討—
作業療法. 2019.38:117-122.
腕神経叢損傷の1症例を対象に，14日間の疼痛日内変動の評価と日中の身体活動量の評価を行い，日中の活動量が疼痛の律動性に関与するかを検討した.
2. 佐藤剛介，大住倫弘，信迫悟志，森岡 周
経頭蓋直流電気刺激と有酸素運動の併用介入が圧痛閾値および安静時脳波活動に及ぼす影響
PAIN REHABILITATION. 2019. 9(1).
経頭蓋直流電気と有酸素運動を併用介入が，圧痛閾値と疼痛閾値の感受性の指標である Peak alpha frequency に及ぼす影響を検討した.

3. 1. 3. 国内ジャーナル（総説）

1. 森岡 周
慢性疼痛の病態を説明する脳内メカニズム：認知の歪みと身体意識の変容を中心に.
ペインクリニック. 2018. 39(4): 25-34.
慢性疼痛の病態を認知と身体意識の視点から解説し，その背景にある脳メカニズムについても解説した.
2. 大住倫弘，住谷昌彦
CRPS のリハビリテーション：その現状と問題点
ペインクリニック. 2018. 39(4): 165-172.
CRPS に対するリハビリテーションのエビデンスを概説し，基本的なリハビリテーションのコンセプトを提案した.

3. 大住倫弘, 佐藤剛介
疼痛に対する物理療法の臨床実践
理学療法. 2018. 35(7): 592-600.
疼痛に対する物理療法の基本コンセプトとエビデンスを概説して, 有効性と限界点を概説した.
4. 尾川達也, 藤本修平, 小向佳奈子, 杉田翔
社会参加に向けた目標の設定方法
月刊 地域リハビリテーション. 2018. 13(5): 366-371.
地域リハビリテーションに携わる医療従事者が, 現場で利用者の社会参加を促進する際に必要となる目標設定方法について, 最新の知見を取り入れながら解説している.
5. 尾川達也, 藤本修平
リハビリテーション領域における Shared Decision Making の実践に必要な行動 身体障害領域を中心としたフォーカスグループインタビューの結果
日本プライマリ・ケア連合学会誌. 2018. 41(2): 53-59.
リハビリテーション領域における Shared Decision Making に必要な要素について, 理学療法士と作業療法士を対象にフォーカスグループインタビューを用いた質的分析を行い, リハビリテーション領域における意思決定状況を踏まえた 16 個の要素を抽出することができた.
6. 森岡 周
神経科学的知見から課題指向型リハビリテーションを考える
臨床リハ. 2018. 27(6): 517-523.
脳卒中患者に対する課題指向型リハビリテーションの背景となる神経科学的知見を解説した.
7. 岡田洋平, 萬礼応, 福本貴彦, 青山朋樹, 高橋正樹
パーキンソン病の歩行障害に対するリハビリテーションの効果と介入戦略
Bio Clinica. 2018. 33(6): 49-52.
パーキンソン病の歩行障害に対するリハビリテーションの効果のエビデンスおよび Lasser 計測システムを用いた TUG 評価や Split-belt treadmill training を用いた潜在的な歩行調整の可能性について解説した.

8. 石垣智也, 森岡 周
前頭前野の脳科学
脳の看護実践. 2018. 4(1). 54-59.
看護実践の示唆となる前頭前野に関する基礎的な知見を概説し, デフォルトモードネットワークとマインドフルネス療法の関係をトピックスとして紹介した.
9. 今井亮太, 大住倫弘, 森岡 周
急性疼痛時における慢性化予防を目的とした理学療法
日本運動器疼痛学会誌. 2018.10(2).187-192.
術後急性期に生じる問題点や新たな評価などを概説した.
10. 今井亮太, 石垣智也, 森岡 周
運動と脳科学
脳の看護実践. 2018.4(2).81-85.
運動関連領域の役割について基本的な内容を概説した.
11. 岡本昌幸, 岡田洋平
リハビリテーションとグループ療法 パーキンソン病
総合リハビリテーション. 2018. 46(9): 815-820.
パーキンソン病患者に対する個別リハビリテーションと集団リハビリテーションを併用した外来リハビリテーションの取り組みについて解説した.
12. 大住倫弘
病期別にみた疼痛メカニズムーリハビリテーションの視点からー
物理療法科学. 2018. 25: 19-26.
リハビリテーションの視点から, 疼痛の病態メカニズムを急性期と慢性期に分けて解説し, それぞれに適していると考えられているリハビリテーションを提案した.
13. 石垣智也, 森岡 周
大脳基底核の脳科学
脳の看護実践. 2019. 4(3): 81-86.
看護実践の示唆となる大脳基底核に関する基礎的な知見および機能障害を概説し, モチベーション,意欲との関係をトピックスとして紹介した.

14. 大住倫弘, 住谷昌彦, 大竹祐子, 森岡 周
難治性疼痛のリハビリテーション研究
日本基礎理学療法学雑誌. 2019. 21(1): 69-78.
難治とされている幻肢痛と CRPS のメカニズムをそれぞれ解説し, そのリハビリテーション評価・治療について自身の研究結果を交えて考察した.

15. 森岡 周
身体性変容のメカニズムとニューロリハビリテーション.
Pain Research. 2019. 34: 10-18.
慢性疼痛の病態を身体意識の視点から解説し, その背景にある脳メカニズムおよびリハビリテーションも解説した.

16. 森岡 周
身体性システム科学とリハビリテーション
心臓リハビリテーション. 2019. 25:1-7.
身体性システム科学とリハビリテーションとの接点について概説した.

17. 今井亮太, 石垣智也, 森岡周
大脳辺縁系
脳の看護実践. 2019. 4: 68-73.
大脳辺縁系の構造と機能について概説した.

18. 大住倫弘, 信迫悟志, 嶋田聡太郎, 森岡 周
プロジェクション科学を痛みのリハビリへ応用する.
認知科学. 2019. 26(1): 30-39.
プロジェクト科学の視点から痛みのリハビリテーションを再考して, どのような症例に有用なのかを議論した.

3. 2. 学術著書

1. 森岡 周
コミュニケーションを学ぶ (単著)
協同医書出版社. 2018.
生物学的あるいは社会学的なコミュニケーションについて, 学際的に図表を用いながら分かりやすく解説した.
2. 岡田洋平
神経難病リハビリテーション 100 の叡智 (分担)
株式会社 gene. 2018. pp186-188, pp205-208, pp238-240.
パーキンソン病への筋力増強練習の有効性に関するエビデンスと具体的な介入方法, 側屈姿勢の病態と介入方法, 部分免荷装置を用いた床上歩行練習とトレッドミル歩行練習の適応と具体的な実施方法について解説した.
3. 岡田洋平
パーキンソン病の医学的リハビリテーション (分担)
日本医事新報社. 2018. pp86-91.
パーキンソン病の平衡障害の特性と機序, リハビリテーションにおける評価, 介入戦略について解説した.
4. 信迫悟志
理学療法 MOOK23 (分担)
回復期・生活期の脳卒中理学療法
三輪書店. 2018. pp86-100.
回復期における疼痛管理について, CRPS の病態と対応, 感覚障害への対応, 心理的対応と自己管理の観点から解説した.
5. 岡田 洋平
標準理学療法学 神経理学療法学 第2版 (分担)
Parkinson 病の理学療法
医学書院. 2018. pp307-322
パーキンソン病のリハビリテーションにおける評価, 介入戦略について解説した.

6. 信迫悟志
標準理学療法学 神経理学療法学 第2版 (分担)
「神経ネットワークと高次脳機能障害」・「失行」・「水頭症」・「失語」
医学書院. 2018. pp16-29, 44-45, 173-183, 184-186
「神経ネットワークと高次脳機能障害」, 「失行」, 「水頭症」, 「失語」を解説した.
7. 松尾 篤
標準理学療法学 神経理学療法学 第2版 (分担)
「脳卒中の障害構造」
医学書院. 2018. pp76-89
脳卒中の障害, 障害評価の意義, 病期別の理学療法士の役割について解説した.
8. 冷水 誠
標準理学療法学 神経理学療法学 第2版 (分担)
「姿勢バランス障害」
医学書院. 2018. pp240-249.
バランス障害の病態に加えて, 評価と理学療法について解説した.
9. 森岡 周
標準理学療法学 神経理学療法学 第2版 (編集) (分担)
「運動失調」・「上肢機能障害」
医学書院. 2018. pp140-151, pp288-302.
「運動失調」・「上肢機能障害」の神経機構とその障害の特徴について解説した.
10. 森岡 周
身体性システムとリハビリテーション科学 第2巻 身体認知(編集) (分担)
身体失認・失行症のリハビリテーション 身体意識の問題から捉える
東京大学出版会. 2018. pp203-246
身体失認・失行症の病態を運動主体感・身体所有感の視点から解説した.
11. 森岡 周
神経筋障害理学療法学テキスト 改訂第3版 (分担)
「運動失調とは」
南江堂. 2018. pp177-188.
運動失調症についてのメカニズムと評価およびリハビリテーションを解説した.

12. 森岡 周

脳卒中理学療法の理論と技術（分担）脳の可塑性と運動療法

MEDICAL VIEW. 2019. pp396-417.

脳卒中に対する理学療法の理論と技術に関して脳の可塑性のメカニズムから解説した.